

〔 論文 〕

前史におけるスラブ人（１）

神山 孝夫

言語とは本来的に話者の口から発される，何らかの意味と結びついた音声である．それゆえ言語はもともと話者が音声を発する瞬間にのみに存在する．文字を得て，はじめて言語は書記言語としての側面を獲得し，固定された文証という形で後代に残される．このような制限がある以上，何語の場合であれ，その過去の状態を遡れば，文証は必ずどこかの時点で断絶する．その断絶の時点は，例えば英語や日本語の場合にはほぼ 7 世紀終わりに，ラテン語の場合には紀元前 4 世紀に置かれる．例外的に，口伝によってより以前の状態が数世紀の間保持され，後代に書き留められるという幸運に恵まれたギリシア語やサンスクリット，あるいはアヴェスタの場合であっても，その断絶の時点が紀元前 10 世紀を超えることはない．

このような資料の限界があっても，なお少なくとも部分的には文証以前の言語を再構築することが可能である．そのために採られるのは主として比較言語学的手法であるが，文証以前の段階を言語学的に正しく推理するためには，無論その必然的前提として，その言語を話す民族の歩みを正確に把握する必要がある．本稿の目的は比較言語学，文献学，語彙の借用関係，地名学など，広義の言語学的手法のみならず，歴史学や考古学の成果をも取り入れて，スラブ人とその隣接諸民族の前史時代の歩みを客観的に総括し，スラブ語と印欧語の前史研究に資することにある．

文字化以前のスラブ人

スラブ人が本格的に歴史に登場するのはスラブ人が文字化した時点、すなわち古代教会スラブ語が誕生した時点とみなしていいだろう。フランク王国東部を受け継いだルートヴィヒⅡ世（別名ドイツ人王）治世下の東フランク王国は、ローマカトリックの権威を盾として、隣接する大モラビア公国併合を画策していた。これに対し、862年モラビア公ロスチスラフは、ローマカトリックに対抗できる唯一の勢力であるビュザンティオンの東ローマ皇帝ミカエルⅢ世に庇護を求める決断を下す。その求めに応じた皇帝の命によって、哲人とも称されるコンスタンティノス（後のキュリロス）とメトディオス⁽¹⁾の兄弟が聖書のスラブ語訳を開始し、翌年モラビアに向けて派遣された。彼らは恐らくスラブ人を父に持ち⁽²⁾、当時ギリシア語とスラブ語が等しく話されたテッサロニケー（セサロニキ）に生まれ育った両言語のバイリンガルであった。ここにスラブ人の文字化がはじまる。

文字化の少なくとも2世紀前の時点で、すでにスラブ人は西はエルベ川、南はバルカン半島の全域、東はスズダリ辺りとドニエプル川河口を結ぶ線、北はラドガ湖にまで広がっていた⁽³⁾。つまり、スラブ人居住地は、今日の国家で言えば、ドイツ東部、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー、オーストリア、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ユーゴスラビア、アルバニア、ギリシア、ブルガリア、ルーマニア、モルドバ、ウクライナ、ベラルーシ、そしてロシアのヨーロッパ部分にまたがっていたことになる。ただし、そこには他の言語との競合関係が存在した地域も含まれる。

地理的にこれほど広大な地域を占めながらも、9世紀当時のスラブ人は言語的にほぼ均一性を保ち、この言語領域の周辺部であるバルカン半島南東部の方言を基盤として成立した古代教会スラブ語が全スラブ世界に共通する文語としての機能を果たした。つまり、当時、スラブ語内の方言分化はほとんど進んでいなかったと考えられる。後述するように、スラブ人がその原住地から拡大したのは古代教会スラブ語が成立する直前のこととは考えにくいから、前史時代のスラブ人とその言語に関しては次のような推

論が成り立つ：

1. スラブ人の居住地は方言分化の発生を許さないほど統一性の高い、恐らく比較的狭い地域であった；さらに言えば、この居住地におけるスラブ人の人口はかなり少かったはずである；
2. スラブ人はその居住地から急速に居住地域を広げた；これはスラブ人の人口が何らかの要因で急激に増えたことを物語る。

ゲルマン人とスラブ人

過去に行われた民族移動あるいは拡大の原因は後代の我々には必ずしも常に明らかではない。Martinet (1986, 1994²: 24ff.; 2003: 14ff.) は多くの場合にその原因を文明の伝播とそれに伴う食糧事情の改善に求める興味深い説を記している。このような視点を採れば、上記の推論は歴史的事実に大筋符合すると考えられる。

小麦の栽培が困難な寒冷地域に位置した大移動前のゲルマン人は、その食料生産性の低さから得られる必然的帰結として、人口の比較的少ない、ヨーロッパの辺境を形成した。先進地域となった地中海世界から小麦栽培が困難なアルプス以北に食料生産技術の進歩がもたらされるのは紀元の変り目回りで見積もられ、これと交易による物資事情の改善から、まず現在のドイツ北部からスカンディナヴィア半島にかけての地帯が、6世紀の歴史家ヨルダネスの表現を借りれば *officina gentium* 「人々を生み出す工房」あるいは *vagina nationum* 「子孫を生み出す女陰」 (Iordanes, *Getica* 25) となつて、ゲルマン人は急速にその人口・勢力を増し、結果として4世紀に周知の大移動が起こる。つまり、漢民族を脅かし続けた北方系遊牧民族の匈奴と同一視されることが多いフンのヨーロッパへの到来は、ゲルマン人の大移動を直接的に促したきっかけではあったが、その当時すでにゲルマン人拡大の潜在的な条件はできあがっていたとみなすべきである。

地名の証拠からすればスラブ人は紀元の変り目ごろからドナウ川中流域あたりに少しずつ進出したらしく、後述のスラブ人の「ドナウ流域起源

説」はこの記憶がやや歪んで後世に伝えられたものと考えられるが、スラブ人の大規模な拡大が生じたのはゲルマン人拡大の後のことである。特にバルト海のごトランド島周辺から南東に漸次移動したゴート人は、カルパチア山脈の北方の西ブグ川とドニェストル川流域を經由して黒海北岸（東ゴート）と西岸（西ゴート）に進んだ。その途中には後述のようにスラブ人の原住地があったと考えられ、ゴート人は2世紀頃から源郷のスラブ人と接触を持つ位置に達する。このような主としてゲルマン人との接触によって、かつてゲルマン人自信が経験したように、スラブ人の物質的状況も漸次改善され、それに伴う人口の急激な増加が生じた。これがスラブ人拡大の潜在的原因であると考えられよう。フンの到来による玉突き現象によって特にゴート人やランゴバルド人に代表されるゲルマン諸種族がローマ帝国内に侵入したのにも似て、突厥に圧迫された中央アジアのアヴァールが6世紀後半にヨーロッパに侵入した際、その期に乗じてスラブ人はバルカン半島全体に広まるに至ったのである。

ゲルマン語からの借用語

ゴート人を代表とするゲルマン諸種族と源郷におけるスラブ人との接触を持ったことは明白であり、スラブ語本体の語彙の中にもその痕跡が残されている。下記は前史時代にスラブ語がゲルマン語から採用したと思われる語彙の例である⁽⁴⁾。借用関係や意味発達は「→」で、正常な言語発達は「>」で示す。

1) 統治, 軍事

Gmc. *brunjōn-「鎧」, Goth. brunjo (cf. OE byrne, G. Brünne) → PS *brunjāns > CS *brъnję (OCS brъnję, R. броня)

Gmc. *fulkaz「群集」, OHG folk (cf. E. folk, G. Volk) → PS *pulkas⁽⁵⁾ > CS *рѣлкъ「軍隊」(OCS рѣлкъ, OR пылкъ, R. полк⁽⁶⁾)

Gmc. *gardaz「囲まれた場所」, Goth. gards「家」(cf. E. yard「建物を除く敷地部分」, garden「庭園」(< ONF gardin)) → PS *gardas > CS *gordъ

- 「(要塞) 都市」(OCS *gradъ*, R. город⁽⁶⁾)
 Gmc. **gastiz* 「客」, Goth. *gasts* (cf. E. *guest*, G. *Gast*) → PS **gastis* > CS **gostъ* (OCS *gostъ*, R. гость)
 Gmc. **helmaz* 「兜」, Goth. *hilms* (cf. E. *helmet*, G. *Helm*) → PS **chelmas* > CS **šelmъ*⁽⁷⁾ (OCS *šlěmъ*, R. шлем⁽⁶⁾)
 (Lat. *Caesar* 人名 →) Goth. *kaisar* 「帝」(cf. G. *Kaiser*) → PS **kaisaris* > CS **cěsarъ*⁽⁸⁾ (OCS *cěsarъ*, R. царь)
 Gmc. **mekis* 「剣」, Goth. *meki* (cf. OE *mēce*) → PS **mekis* > CS **mečъ*⁽⁷⁾ (OCS *mečъ*, R. меч)

2) 技術

- Gmc. **bōkōs* 「ブナ」(複数), Goth. *bokos* 「(ブナの板に刻んだ) 文字, 文書」(cf. E. *book*) → PS **baukū-* > CS **buky*, **bukъv-* (OCS *buky*, *bukъv-*, R. буква 「文字」)
 Gmc. **handagaz* 「熟練の」, Goth. **handags* (< *handus* 「手」; cf. OE *listhendig*, G. *behende* 「機敏な」) → PS **chandagas* > CS **chōdogъ* (OCS *chōdožъstvo*) 「知恵」, R. худож(ество) 「芸術」
 Gmc. **lēkaz* 「(ことばによる) 癒し」(Goth. *lekeis* 「医者」, *lekinōn* 「治す」, E. *leech* 「薬師」) → PS **lēkas* > CS **lěkъ* 「治療(?)」(Cz. *lěk(ař)* 「医者」, R. лек(арство) 「薬」, леч(ить) 「治す」)
 Gmc. **plōgaz* 「(家畜が引く) 犁」, OHG *pfluog* (cf. E. *plough*, G. *Pflug*) → PS **plaugas*⁽⁵⁾ > CS **plugъ* (OCS *plugъ*, R. плуг)

3) 社会制度, 経済

- Gmc. **gabigaz* 「富裕な」, Goth. *gabigs* (cf. OE *gifig*) → PS **gabigas* > CS **gobъdzъ* (OR *гобъзь*, R. гобза (Даль) 「富裕」)
 Gmc. **leihwō* 「貸し」, Goth. *leihwan* 「貸す」(E. *lend*, *loan*) → PS **leichwā*, CS **lichva* 「利息」(OCS *lichva*, R. лихва)
 (Lat. *caupō* 「店主」 →) Gmc. **kaupaz* 「商人」, Goth. *kaupon* 「商う」(cf. E. *cheap* 「(よい売買 →) 安い」, G. *Kauf* 「売買」) → PS **kaupas* > CS **kupъ* 「購入」(OCS *kupъ*, *kuplja*, *kupiti*, R. купля, купить)

(Lat. *centum* 「100」 → Goth. *kintus* 「(1/100 ? →) 少額貨幣」 → PS **kintā*
(集合名詞) > CS **cęta* ⁽⁹⁾ (OCS *cęta* 「小銭」, R. *цата* 「後光」)

(MGk. *κυρι(α)κόν* 「主の館」 → Goth. **kiriko* 「教会」 (cf. E. *church*, *kirk*,
G. *Kirche*) → PS **kirkū* > CS **сырку*, **сыркъу-* ⁽⁹⁾ (OCS *сырку*, *сыркъу-*,
R. *церковь* ⁽⁶⁾)

Gmc. **panningaz* 「金銀貨」 (指小形), OHG *pfenning* (cf. E. *penny* 「1ペ
ニー」, G. *Pfennig* 「1プフェニツヒ」) → PS **pēningas* ⁽⁵⁾ > CS
**pěnědъ* ⁽¹⁰⁾ (OCS *pěnědъ* 「金銀貨」, Pol. *pieniądz* 「金銭」)

4) 食品, 生活物資

(Lat. *acētum* 「(ワイン) 酢」 → Goth. *ake(i)t* (cf. E. *acid* < Lat. *acidum*, G.
Essig (メタテーズ)) → PS **akitas* > CS **оцѣтъ* ⁽⁹⁾ (OCS *оцѣтъ*, R. *оцет*)
Gmc. **beudaz* 「卓」, Goth. *biups* (cf. OE *bēod*) → PS **beuda-* > CS **bljudo-*
(OCS *bljudъ* 「料理」, *bljudo* 「卓」, R. *блюдо* 「大皿, 料理」)

(Gk. *δίσκος* 「輪」 → Lat. *discus* 「円盤」 → Gmc. **diskaz* 「皿」 (cf. E. *dish*,
G. *Tisch* 「机」) → PS **diskā* 「板」 > CS **дѣска* (OCS *дѣска* ⁽¹¹⁾, R. *доска*)
Gmc. **hlaibaz* 「パン」, Goth. *hlaifs* (cf. E. *loaf*) → PS **chlaibas* > CS **chlěbъ*
(OCS *chlěbъ*, R. *хлеб*)

Gmc. **kaldingaz* (? < **kaldaz* 「冷たい」; cf. Goth. *kalds*, E. *cold*, G. *kalt*) →
PS **kaldingas* > CS **koldędъ* ⁽¹⁰⁾ 「井戸」 (OCS *kladędъ*, R. *колодец* ⁽¹²⁾)

(Lat. *catillus* 「深皿」 → Gmc. **katilaz* 「大鍋」, Goth. **katil(u)s* (cf. E. *kettle*
「やかん」) → PS **katilas* > CS **котѣлъ* (OCS *котѣлъ*, R. *котёл*)

Gmc. **laukaz* 「(長) 葱」, OHG *louh* (cf. E. *leek*, G. *Lauch*, *Knoblauch* 「ニ
ンニク」) → PS **laukas* > CS **lukъ* (OCS *lukъ* 「ニンニク」, R. *лук*
「(玉) 葱」)

(Lat. *mēnsa* 「食卓」 > VLat. *mēsa* → Goth. *mes* 「深皿」 (cf. OE *mēse* 「食
卓」) → PS **meisā* (?) 「深皿」 > CS **misa* (OCS *misa* 「料理」, R. *миса*
「深皿」)

Gmc. **smak-* 「味」, Goth. *smakka* 「イチジク」 (cf. E. *smack* 「風味」, G.
schmecken 「味がする」) → PS **smakū-* 「イチジク」 > CS **smoky*,

*smokъv- (OCS smoky, smokъv-, R. смоква)

Gmc. *stiklaz 「つの」, Goth. stikls 「(つので作った) 杯」 (cf. OE sticel 「つの, 先の尖った棒」) → PS *stiklaN > CS *stъklo (OCS stъkl(ęnica) 「ガラスの杯」, R. стекло 「ガラス」)

Gmc. *wīnagardaz 「ぶどう園」, Goth. weinagards (cf. E. vineyard) → PS *wīnagardas > CS *vinogordъ (OCS vinogradъ, R. виноград 「ぶどう」)

5) 動物, 家畜関係

Gmc. *gans- 「ガチョウ」 (cf. E. goose, G. Gans) → PS *gansis⁽¹³⁾ > *CS *gъsъ (OCS gъsъ, R. гусь)

(Lat. clīvus 「丘」 → Goth. hlaiw 「墓」 (OE hlāw 「丘, 墓, 洞窟」) → PS *chlaivas > CS *chlěvъ 「(穴倉? →) 家畜小屋」 (OCS chlěvъ, R. хлев)

(Lat. leō 「ライオン」 → Goth. *liwa- (cf. OE lēo) → PS *liwas > CS *lъvъ (OCS lъvъ, R. лев, льва)

Gmc. *skattaz 「財産」, Goth. skatts 「金銭」 (OE sceatt 「財産」) → PS *skatas > CS *skotъ 「家畜」 (OCS skotъ, R. скот)

(Gk. ἑλέφας, ἑλέφαντος 「象」 → Lat. elephantus → Goth. ulbandus 「らくだ」 (cf. OE olfend, E. oliphant 「象牙の笛」) → PS *vulbandus⁽¹⁴⁾ > CS *vъlъbъdъ (OCS velъbъdъ, R. верблюды⁽¹⁵⁾)

6) その他, 文化語の類

Gmc. *dōmaz 「判断」, Goth. doms (cf. E. doom) → PS *daumā- > CS *duma (R. дума 「思考, 議会」, думать 「思う」)

Gmc. *ga-razdaz 「口調のはっきりした(?)」, Goth. *ga-razds (< razda 「ことば」; cf. OE reord (< *rezdō) 「声」) → PS *garāzdas > CS *gorazdъ (R. горазд 「上手だ」)

Gmc. *ganesan 「快復する, 逃れる」, Goth. ganisan (cf. OE genesan, G. genesen) → PS *ganez-nan-tei > CS *goneznqti (OCS goneznqti 「逃れる」)

Gmc. *listis 「策略」, Goth. lists (cf. OE list, G. List) → PS *listis > CS *lъstъ (OCS lъstъ 「欺瞞」, R. лестъ 「へつらい」)

上で記した例においては、対応するゴート語形が欠けていたり、ゴート語の形態と想定されるスラブ祖語の形態とが微妙なずれを示している場合もあるが、それは下記のような事情によるものである。文証されるゴート語の形態は、西ゴートの司教ウルフィラ⁽¹⁶⁾が4世紀中葉にダキア、あるいは後に移住を許されたモエシアで書き記したオリジナルを、それから100年以上経った500年ごろにイタリアの地で書写したコピーによって伝わるものであって、2世紀にスラブ人が接触したゴート語とは時間的にも地理的にも明らかな相違があり、また、ウルフィラによるゴート語のテキストは聖書であるから語彙の偏りがあるのも致し方ない。

このような制限がある関係で、上記の例語は必ずしも常にゴート語から直接にスラブ語に採り入れられたとは言い切れないが、いずれにせよ何らかのゲルマン種族との接触から得られたとみなして差し支えないと考えられる。ここに集められた例だけを見ても、ローマ文化の恩恵を受けて拡大を果たしたゲルマン人から、スラブ人が物質的、文化的、軍事的に様々な恩恵を受け、その後のスラブ人拡大の礎が築かれたことは明らかである。

ドナウ流域起源説

さて、ゲルマン人とはじめて接触した頃のスラブ人はどこに居住していたのであろうか。この点、すなわちスラブ人の原住地の問題に関しては様々な説が提出されており、残念なことに細部においてははまだ研究者間で意見の一致を見るに至っていない。それらの中でもドナウ川中流域のパンノニアあたりを故地とする説が最も古い。

その根拠となったのは12世紀の学僧ネストルの筆になると伝えられる『原初年代記』の冒頭の記述である。同所には、旧約聖書の大洪水の話とノアの息子たちセム、ハム、ヤペテによる土地の分割、バベルの塔の建設に続き、次のように書かれている⁽¹⁷⁾。

быс(ть) языкъ единъ... и съмѣси Б(ог)ъ языки· и раздѣли на ·ѡ· и ·ѡ· языка и расъсѣя по всей земли· по размѣшени же языкъ· Б(ог)ъ вѣтромъ великимъ разраши столпъ... по размѣшени же столпа· и по

раздѣленьи языкъ· прияша с(ы)н(о)ве Симови· вѣсточныя страны· а
 Хамови с(ы)н(о)ве полуденьныя страны· Афетови же прияша западъ· и
 полунощныя страны· ѿ сихъ же ·Ѡ· и ·Ѣ· языку· быс(ть) языкъ
Словѣнскъ· ѿ племени Афетова· Норци еже суть Словѣне·

Во мнозѣхъ же времѣхъ(ъ)· сѣли суть Словѣни по Дунаеви· гдѣ есть
 ныне Оугорьска земля· и Болгарьска· [И] ѿ тѣхъ Словѣнъ разидошася
 по землѣ· и прозвашася имены своими· гдѣ сѣдше на которомъ
 мѣстѣ·... Волхомъ бо нашедшемъ на Словѣни на Дунаискія· [и]
 сѣдшемъ в(ъ) нихъ(ъ)· и насилалемъ имъ· Словѣни же ѿви пришедше
 сѣдоша на Вислѣ·... также и ти Словѣне пришедше и сѣдоша по
 Днѣпру·... а друзии сѣдоша межю Припетыю и Двиною·... Словѣни же
 сѣдоша ѿколо езера Илмера·...

言葉は一つであった... 神は言葉をかき乱し、70 と 2 の民族に分け、全
 土にまき散らされた。言葉の攪乱の後に神は大風をもって塔を破壊され
 た... 塔の破壊と言葉の分割の後にセムの息子たちは東の諸国を取り、
 ハムの息子たちは南の諸国を、ヤペテの（息子たち）は西と北の諸国を
 取った。これらの 70 と 2 の民族のうちには、ヤペテの種族から出たスロ
ヴェネの民族、すなわちノルツィがあつて、それはスロヴェネであつた。
 多くの年月の後、ドナウに沿ってスロヴェネが定住した。そこにはいま
 ウグリとボルガリの国がある。彼らはそれらのスロヴェネから地上に広
 がり、住んでいた場所を自分の名として呼ばれた... ヴォロヒがドナウ
 のスロヴェネを攻撃し、彼らの間に住み、彼らを迫害したので、スロヴ
 ェネたちのあるものはヴィスラのほとりにやって来て住みつき、... 同様
 にこれらのスロヴェネもドネプルの流域にやって来て住みつき、... また
 他のものは、プリペチとドヴィナの間に住み... スロヴェネはまたイル
 メリ湖の周辺に住み... (下線は筆者；國本他 1987: 5f.)

素直にはわかりにくい下線部をリハチョフに従って「これら 70 と 2 の民
 族のうちには、スロヴェネの民族があつた。というのは、ヤペテの種族に
 発するノルツィといわれるのは、スロヴェネであるから。」(國本他1987:

322) と解釈し、またノルツィをほぼ現在のオーストリアに当たるノリクムの住民と取れば、著者はその地の民もスラブ人とみなしていると考えられ、結果的に、スラブ人はもともとノリクムからパンノニア（ほぼハンガリー）を経てモエシア（ブルガリア）に至るドナウ川中流域に住み、そこから周辺に広まったが、ヴォルヒ（つまりウォルカエ⁽¹⁸⁾）の攻撃を機に、遠くヴィスワ川流域（ポーランド）やドニエプル川流域（ウクライナ）、プリピャチ川とドヴィナ川の間（ベラルーシ）、さらにイリメニ湖周辺のロシア西部など、各地に分散したように読める。また、國本(1972: 42; 1976: 50f.)によればスラブ人の故地がパンノニアであったという趣旨の記述はポスナニの司教ボクフワルの年代記（13 世紀）にも見られるという。これらの記述をもとにパンノニア起源説が唱えられたのは自然なことである。

だが、問題のノリクムからパンノニア、ダキアを経てモエシアに至るドナウ川流域は紀元の変わり目前後からローマ帝国に属しており、上記の2つの年代記の記述に従って仮にスラブ人のパンノニア起源説を採った場合、4 世紀に行われたゲルマン人のローマ帝国進入よりも以前にゲルマン人がこの地でスラブ人と密な接触を持ったとみなす必要が生じてしまう。もちろんこのような想定はまったく無理である。スラブ人の故地が辺境とはいえローマ帝国内にあったとすれば、スラブ人にとってはゲルマン人やその他の近隣諸民族に対して鼻が高かったことであつたろうが、所詮これらの記述がなされた時点よりも数百年から千年遡る時点についての記述内容に全幅の信頼を置くことはできない。20 世紀に入ってニーデルレに否定されて以来、この説が顧みられないのも当然であろう。

西ウクライナ起源説

パンノニア周辺以外にも様々な地域がスラブ人原住地の候補とされてきた。中世の史料ではアラン、アヴァール、フン等のヨーロッパに到来したアジア系遊牧民とスラブ人とが混同されがちだったため、長い間漠然と黒海北岸あたりが想定されていたようだし、20 世紀初頭には（しばしば過度に）独創的な研究姿勢を特徴とするシャーフマトフがバルト海沿岸部から

の南下を夢想した。さらに中葉にはモシンスキによって漠然としたアジア起源説が世に問われた。

2世紀頃からゴート人などのゲルマン人との密な接触が可能であるという点からして、唯一説得力を有するのは、スラブ人の故地をカルパチア山脈の北側に想定する、いわば「西ウクライナ起源説」だけであろう。この説を最初に発したのはチェコが生んだ19世紀最大のスラブ学者シャファジークらしい。その後、この説は少しずつ想定される範囲は異なるもののニーデルレ、ロスタフィンスキ、ファスマー、ベルンシュテイン、フィーリン、マヴローディン、ギンブタス等によって支持されている。

文献学あるいは歴史学の観点からこの説を支持するのは、主として西ゴートの歴史家ヨルダネスとビュザンティオンの歴史家プロコピオスによって6世紀になされた記述である。

ヨルダネスはその著書 *Getica* において、彼自身が血を引くゴート人がどのようにしてスカンディナヴィアから広まり、移動を繰り返した後に西ローマ帝国内で主権国家を建設するに至ったのかを記している。その中で、スラブ人の故地に関して示唆に富むのが下記の部分である。

introrsus illis Dacia est, ad coronae speciem arduis Alpibus emunita, iuxta quorum sinistrum latus, qui in aquilone vergit, ab ortu Vistulae fluminis per immensa spatia Venetharum natio populosa consedit. quorum nomia licet nunc per varias familias et loca mutantur, principaliter tamen Sclaveni et Antes nominantur. Sclaveni a civitate Novietunense et laco qui appellatur Mursiano usque ad Danastrum et in boream Viscla tenus commorantur: hi paludes silvasque pro civitatibus habent. Antes vero, qui sunt eorum fortissimi, quae Ponticum mare curvatur, a Danastro extenduntur usque ad Danaprum, quae flumina multis mansionibus ad invicem absunt. (*Getica* 34-35)

それらの間にはダキアがあり⁽¹⁹⁾、王冠に似た形状の険しいアルプス⁽²⁰⁾により画される。その北斜面の左側近辺には、ウィストラ【＝ヴィスワ】

川の源泉から測り知れぬ広大な地域にわたって、多数のウェネティの民が住む。それらの名前は、今では様々な種族や土地にしたがって変わってはいるが、それらはおもにスクラウェニとアンテスと呼ばれている。スクラウェニはノヴィエトゥヌムの町⁽²¹⁾とムルシアヌスという湖⁽²²⁾から、ダナストル【＝ドニエストル】まで、北はウィスクラ【＝ヴィスワ】までに住む。彼らは町の代わりに沼地と森を持つ。だが、これら種族の中でもっとも強いアンテスは、何日もの行程で隔たるダナストルからダナプル【＝ドニェプル】まで、ポントス海【＝黒海】の湾曲部に広がる。（下線は筆者；國本1976: 114ff. を補正）

後に詳しく検討するように、上記の箇所においてウェネティ (Venethi) はスラブ人の総称として用いられていると、またスクラウェニとアンテスはその部族名であると考えられる。だとすれば、ヨルダネスの記述からは、当時スラブ人がカルパチア山脈の北側の地域を占めていたことが、また、下線部の地名が現在のどこに当たるのかは確定できないが、ヴィスワ川上流域からドニエストル川流域南方にかけての、恐らくプリピャチ川南方のヴォルィニ地方とポドリエ地方を中心とする内陸部にはスクラウェニが、ドニエストル川からドニェプル川にかけての黒海沿岸に近い部分にはアンテスが居住していたことが読み取れる。

ヨルダネスの同時代人プロコピオスの『戦記』にもスクラベノイ（スクラウェニ）とアンタエ（アンテス）が幾度も登場する。その記述の多くは彼らがドナウ川を渡って東ローマ帝国内にたびたび進入してきたことや、彼らのゲリラ的な戦法に関するものだが、その第5巻と第7巻には彼らの出自、言語、文化、及び地理的分布についてかなり詳しく触れた箇所がある。

καὶ αὐτῶν πλεῖστοι Ὀύννοι τε ἦσαν καὶ Σκλαβηνοὶ καὶ Ἄνται, οἱ ὑπὲρ ποταμὸν Ἰστρον οὐ μακρὰν τῆς ἐκείνη ὀχθῆς ἴδρυνται. (V. xxvii. 2)

その（騎馬武者の）多くはウンノイ（フン）に加えてスクラベノイとアンタエであり、彼らはイストロス（ドナウ）川の北側、岸からさほど離

れていない場所に住んでいる。

...Σκλαβηνοί τε καὶ Ἄνται, οὐκ ἄρχονται πρὸς ἀνδρὸς ἑνός, ἀλλ' ἐν δημοκρατίαι ἐκ παλαιοῦ βοιτεύουσι,... (VII. xiv. 22)

スクラベノイとアンタエはひとりの人間に支配されているわけではなく、昔から民主的に（一族相和して）暮らしている。

θεὸν μὲν γὰρ ἓνα τὸν τῆς ἀστραπῆς δημιουργὸν ἀπάντων κύριον μόνον αὐτὸν νομίζουσιν εἶναι,... (VII. xiv. 23)

というのは、彼らは唯一の神、つまり雷の創造者をあらゆるものの主人と信じているからである。

ἔστι δὲ καὶ μία ἑκατέροις φωνὴ ἀτεχνῶς βάρβαρος... (VII. xiv. 26)

そしてまたどちらも同じことばを持つ。これは極めて野蛮なものである。

καὶ μὴν καὶ ὄνομα Σκλαβηνοῖς τε καὶ Ἀνταῖς ἐν τὸ ἀνέκαθεν ἦν. Σπόρους γὰρ τὸ παλαιὸν ἀμφοτέρους ἐκάλουν, ὅτι δὴ σποράδην, οἶμαι, διεσκηνημένοι τὴν χώραν οἰκοῦσι. (VII. xiv. 29)

実際、スクラベノイとアンタエは遠い昔にはひとつの名で呼ばれていた。つまり、かつて彼らはどちらもスポロイ⁽²³⁾と呼ばれていたのである。これは、ひとりひとりが離れて住んでおり、彼らが自分の国に散り散りに(σποράδην)住んでいるからであろう。

プロコピオスの記述からは、スクラウェニとアンテスが同じ民族に属していて、彼らがドナウ川の北方に居住していることが確認され、これらはヨルダネスの記述とも符合する。加えて、プロコピオスには、スクラウェニとアンテスが同じ言語を話していることと、彼らが雷神を信仰しているという二点の重要な指摘がなされている。これらすべてからすれば、スクラウェニとアンテスはスラブ人に他ならないと考えられる。実際、キリスト教到来以前のスラブ人は、ギリシアのゼウスにも似た雷神ペルーンを最高神とするパンテオンを持っていたのである⁽²⁴⁾。

語彙による原住地探索

上記のように、大まかな歴史学的視点からすれば、スラブ人の原住地は、カルパチア山脈の北側から程近くにある森林と沼の多い地域、すなわちドニエストル川上流からプリピャチ川流域にかけてのポレシエ沼沢地周辺であったと考えられる。残された墓の証拠によりゴート人は2世紀頃にヴィスワ、西ブグ、ドニエストルを経て黒海沿岸に至ったから (Gimbutas 1963: 109ff.), 彼らとスラブ人とが密な接触を持ったことを説明するには、その原住地は同沼沢地南部、すなわちヴォルィニとポドリエの両地域あたりにあったと考えねばならない。

この暫定的な結論を、語彙を利用したいわゆる言語古生物学的な手法 (linguistic paleontology) によって検証してみたい。比較的新しい時代に他言語から借用された語彙ではない、すなわちスラブ語の本来的な、あるいは古い語彙を調査すれば、自ずからスラブ人の原住地の自然環境と彼らの生活の諸側面が見えてくるはずである。以下では主として Филин (1962: 110ff.) と Мавродин (1993: 36ff.) を参考にしてこの分野での成果を概観する。ただし、キーワードには主にロシア語を用いることにしたため、今のロシア語に残されていない語彙は原則として割愛した。本来ならば下記の語彙項目すべてについて綿密な語源調査や語彙借用の年代推定を独自に実施しなければならないところだが、ここではその手続きを欠いていることをお断りしなければならない。いずれこの点については紙面を改めて再検討するつもりである。

まずスラブ人の原住地は海に隣接する場所ではなかったと思われる。その根拠は、印欧祖語の「海」に当たる *mori- (> Lat. mare, R. море, etc.) が、もともと大海原ではなく、大小まったく関係なく水のある場所を表したにも関わらず⁽²⁵⁾、スラブ語は特に「海」を表す語を新たに作り出していないことである。現に、移動によって海に親しく接するようになった他の印欧人グループは様々な海の呼称を獲得している場合が多い⁽²⁶⁾。加えて、後述のようにスラブ語の本来の語彙に淡水魚の名称は多い反面、そこには海水

魚の名称が欠けていることもその傍証のひとつとなろう。

次に、スラブ人は本来的に山地に隣接する場所に居住していたとは思われない。その根拠は、スラブ語の山を表す語のうち *gora* 以外のすべてが後代の借用語であることである。同じく IE **g^werH-* に由来する Lith. *garià*「森」、OPr. *garian*「木」、Alb. *gur*「岩」の語義を参考にすると、その *gora* ももともとは木の生えた小高い丘のような意味合いであつたらしい⁽²⁷⁾。

スラブ人の原住地には数多くの植物が自生しており、そこは温帯の混合樹林帯にあつた。結果として植物関係の語彙が豊富である⁽²⁸⁾：*берёза*「白樺」、*бор*「針葉樹林」、*брусника*「コケモモ」、*былинка*「茎」、*верба*「猫柳」、*ветвь, ветка*「枝」、*ветла*「セイヨウシロヤナギ」、*гонобобель*「クロマメノキ」、*дерево*「木」(*дрова*「薪」)、*дуб*「櫟」、*ель*「エゾマツ⁽²⁹⁾」、*ива*「柳」、*калина*「ガマズミ属の木」、*клён*「楓」、*клюква*「ツルコケモモ」、*кора*「樹皮」、*корень*「根」、*лес*「広葉樹林」、*липа*「菩提樹」、*лист*「葉」、*ольха*「ハンノキ」、*осина*「ヤマナラシ」、*пень*「切り株」、*рябина*「ナナカマド」、*сосна*「松」、*сук*「大枝」、*травa*「草」、*цвет*「花」、*черёмуха*「ウワミズザクラ」、*ягода*「漿果」、*ясень*「トネリコ」。

そして、そこには沼や湖などが多かった（ロシア語に残らなかった語彙は省略）：*болото*「沼」、OR *локы*「沼の一種」、*луг*「水辺の草地」、*лужа*「水溜り」、*озеро*「湖」、*плёс(о)*「川の深み」、*пруд*「池（本来は早瀬、浅瀬）」。

そこには以下のような野生の動物や鳥類が生息していた：*воробей*「雀」、*ворон*「大鳥」、*ворона*「烏」、*голубь*「鳩」、*горлица*「コキジバト」、*горностай*「オコジョ」、*дятел*「キツツキ」、*заяц*「兎」、*козодой*「ヨーロッパヨタカ（鳥）」、*коростель*「ウズラクイナ」、*крот*「モグラ」、*куница*「テン」、*ласка*「イイズナ（イタチの一種）」、*ласточка*「燕」、*лебедь*「白鳥」、*лиса*「狐」、*лось*「ヘラジカ」、*медведь*「熊」、*пенка*「メボソムシクイ属の鳥」、*синица*「シジュウカラ」、*скворец*「ホシムクドリ」、*соловей*「ナイチンゲール」、*удод*「ヤツガシラ（鳥）」、*утка*「鴨」、*хорёк*「ケナガイタチ」*чайка*「カモ

メ⁽³⁰⁾」.

原住地周辺の川や沼、湖には数多くの淡水魚がいた（恐らく漁業に従事していたと思われる）：елец「デース（コイ科）」，карась「鮡」，Ukr. короп「鯉⁽³¹⁾」，линь「テンチ（コイ科）」，лосось「鮭」，окунь「カワスズキ」，пискарь「スナモグリ（コイ科）」，плотва, плотица「コイ科の魚」，сом「鯰」，угорь「鰻」，уклейка「コイ科の魚」，язь「キタノウグイ属の魚」.

そこでスラブ人は農業に従事し，以下のような作物を作っていた：боб「豆」，горох「エンドウマメ」，жито「穀物」，зерно「穀粒」，капуста「キャベツ」，колос「穂」，конопя「麻」，лён「亜麻」，лук「葱」，мак「ケシ」，морковь「ニンジン」，овёс「燕麦」，просо「キビ」，пшеница「小麦」，пшено「引き割りのキビ」，редька「ラディッシュ」，репа「カブ」，рожь「ライ麦」，чечевица「レンズマメ」，ячмень「大麦」.

そして以下のような家畜・家禽を飼っていた：боров「去勢豚」，бык「雄牛」，вол「去勢牛」，гусь「ガチョウ」，кобыла「雌馬」，конь「雄馬」，корова「雌牛」，кур, кура, курица「鶏」，пёс「犬」.

以上より，スラブ人の最古の居住地は山岳地域や海岸あるいはステップ地域から離れた，動植物・鳥類の多数生息する，農業に適した自然豊かな温帯の森林・沼沢地域であったと考えられる．このような自然条件を満たし，かつゴート人が黒海沿岸へ向かった際の通り道にあり，また19世紀から問題にされているブナの分布（ケーニヒェスベルクとクリミア半島を結ぶ線の西側のみ⁽³²⁾）を考え合わせると，これらすべての条件を満たす地域はやはり西ウクライナのポレシエ沼沢地あたりしか見当たらない．

序でながらファスマー，モシンスキ，トルバチョーフ等らが個別に実施した河川名の研究によっても，やはり問題の地域周辺が本来のスラブ語地域と認められるらしい．また，早世した天才的な言語学者イリッチ・スヴィティッチも語彙の分析から，上の地域をスラブ人拡散の出立地とみなしているという．

考古学からのアプローチ

上述のように主として言語学と歴史学における根拠からは、スラブ人の原住地として西ウクライナが有力な候補地となる。考古学の分野では主として2説が存在するが、その一方を採った場合、印欧人拡大の全貌とスラブ人が担った文化の変遷が明示され、西ウクライナ説が一層有望となる。

はじめに「ラウジッツ文化」をスラブ人と結び付けようとする試みについて触れておく。これはヴィスワ川とオドラ川の間、すなわちほぼ現在のポーランドに当たる地域に、紀元前14世紀から4世紀まで存続した、青銅器時代から鉄器時代にわたる高度な農耕文化であり、その呼称は19世紀ドイツの有名な病理学者・人類学者・政治家フィルヒョーの命名による。この文化の担い手は、かつてゲルマン人ではないか、後にはトラキア人やイリュリア人ではないかと疑われてきたらしい。20世紀中葉のモシンスキやレール・スプワヴィンスキの主張以来、ポーランドの学界はやや強引にラウジッツ文化とスラブ人とを結び付けようとしているように見える。

だが、ラウジッツ文化は、他の根拠からスラブ人原住地の有力な候補地と見られるヴォルィニ・ポドリエ周辺に接点を持たない。また、仮にラウジッツ文化の担い手がスラブ人であったとすれば、上で確認したようにスラブ人が海や山と疎遠であった点や、問題の地域はブナの自生地域に含まれることになるから、ブナが本来的スラブ語に知られていない点も、解かれ得ない難題として残ることになってしまう。また、スラブ人の原住地がラウジッツ文化圏とヴォルィニ・ポドリエ周辺に跨っていたとする折衷的な説を採ったところで、その難問は依然として残る。結局のところ、ラウジッツ文化の担い手がスラブ人であったとは考えにくい。この文化の担い手に関する私論は、ウェネティの正体の解明とともに次号に掲載予定の続編に触れることにしたい。

さて、リトアニア出身で合衆国で活躍し、わが国でも『古ヨーロッパの神々』（鶴岡真弓訳、言叢社）の邦訳等でよく知られた高名な考古学者ギンブタス（ギンブティエネー）は、もともと印欧祖語を話していた民族、つ

まりいわば「印欧人」の拡大の歴史から、スラブ人の歴史までについて一貫した考古学的・歴史学的把握をもたらすことに成功した。以下では彼女の説に従って印欧人拡大とスラブ人の歩みを略述する⁽³³⁾。

彼女によれば、印欧人の原住地はカスピ海北方から東に広がる中央アジアのステップ地帯であった⁽³⁴⁾。彼らは独特な埋葬手段「クルガン⁽³⁵⁾」を持つためしばしば「クルガン人」とも称され、この地域一帯に生息する野生の馬を飼い慣らしてこれを戦闘手段に用いた。直接的なきっかけは不明だが、彼らは圧倒的な軍事力を背景に紀元前 4400—4200 年頃、3400—3200 年頃、3000—2800 年頃の計 3 度にわたって大規模な西進と南進を敢行し、結果的にヨーロッパ、小アジア、南アジアの大部分を制圧することに成功した。印欧人あるいはクルガン人は各地で先住諸民族を隷属させ、時を経る間に次第に彼らと混血し、また彼らの生活や言語の習慣を取り込むことによって、様々な近親民族と印欧諸語を生み出したと考えられる。この「クルガン説」は、考古学的なデータばかりか歴史学的あるいは言語学的なデータをも包括的に説明できる優れたアイディアであり、今日ではほぼ定説と受け止めて差し支えないだろう。

クルガン説からすれば、印欧人の小アジアと南アジアへの移動の足跡にははっきりしない点も残るものの、彼らのヨーロッパ侵攻の歩みについてはほぼ明らかと言ってよい。1 回目と 2 回目の侵攻では、黒海の北東を出た印欧人は黒海北岸を西進し、カルパチア山脈手前で二手に分かれて、一方はドニェストル流域を、他方は黒海沿岸とドナウ流域を攻め進み、結果的に東欧全域とバルカン半島、ドイツ、イタリアの大部分が彼らの手に落ちた。3 回目ではカスピ海北側のさらに東方を出た印欧人が前回よりもさらに広い範囲を制圧するに至った。

紀元前第 4 千年期に西ウクライナ周辺にあった非印欧先住民族によるクテニ・トリポリエと呼ばれる新石器（農耕）文化は、黒海北岸を西進してきた印欧人の騎馬軍団に征服された。その後、この地域は金属精錬技術の先進地域となった西からの影響を徐々に受けて、青銅器（北カルパチア墳墓文化 → コマロフ文化 → ビロフルディウカ文化 → ヴィソツコイエ文

化)から鉄器(チェルノレス文化)へと正常な発達を経験し、多少東にその文化圏を広げたが、その直後にイラン系の遊牧民スキュタイに半ば隷属させられることになった⁽³⁶⁾。

しかしながら、この地域の基本的な文化特徴は紀元前3世紀にイラン系のサルマタイに征服されるまで存続したとされている。だとすれば、ククテニ・トリポリエ文化の地を掌握して未知の先住民族と交じり合った印欧人一派は、サルマタイ到来の時点まで実に2000年以上にもわたって、軍事的侵略や外界の影響をあまり受けずに、このカルパチア山脈北方の地に留まったとみなし得ることになるだろう。

ギンブタスはまさにこの印欧人一派をスラブ人の祖先とみなす。これに従えば、スラブ人の原住地は、北カルパチア墳墓文化から数えれば紀元前2000年頃から、第3回目の印欧人侵攻の終わりに数えれば紀元前2800年頃から西ウクライナにあったことになる。この結論は上述のような歴史学と言語学のデータと完全に一致する。すなわちスラブ人の原住地がカルパチア山脈北方のヴォルィニとポドリエの各地方を中心とする西ウクライナの混合樹林と沼沢地にあったことは、もはや疑いようがないと思われる。

太古より黒海北岸地域は中央アジアからヨーロッパへつながる交通の要所である。直感的に言って、そのすぐ目と鼻の先に位置する西ウクライナが2000年以上にもわたって、外敵の侵略も受けずにその等質性を保ち続けたとはなかなか信じがたいかもしれない。現にスキュタイ、ギリシア人、サルマタイ、ゴート、アラン、フン、アヴァール、ブルガル、マジダル、ペチェネグ、クマン等が黒海北岸を支配し、あるいはここを經由してヨーロッパに進出したことが知られている。だが、クルガン人がここを通過した後、スキュタイが到来するまでの2000年近くの間、この地を覆った大規模な民族移動や軍事的侵略は行われなかったらしい。歴史に知られていない小規模な移動があったとしても、平坦な黒海沿岸を進むほうがはるかに容易であることは明白であり、沼沢地と鬱蒼たる森林に覆われたカルパチア山脈の北側に踏み込むことは敬遠されたのではなかろうか。因みに、このような幸運はスラブ人のみならず、その真北に位置したバルト人も共有

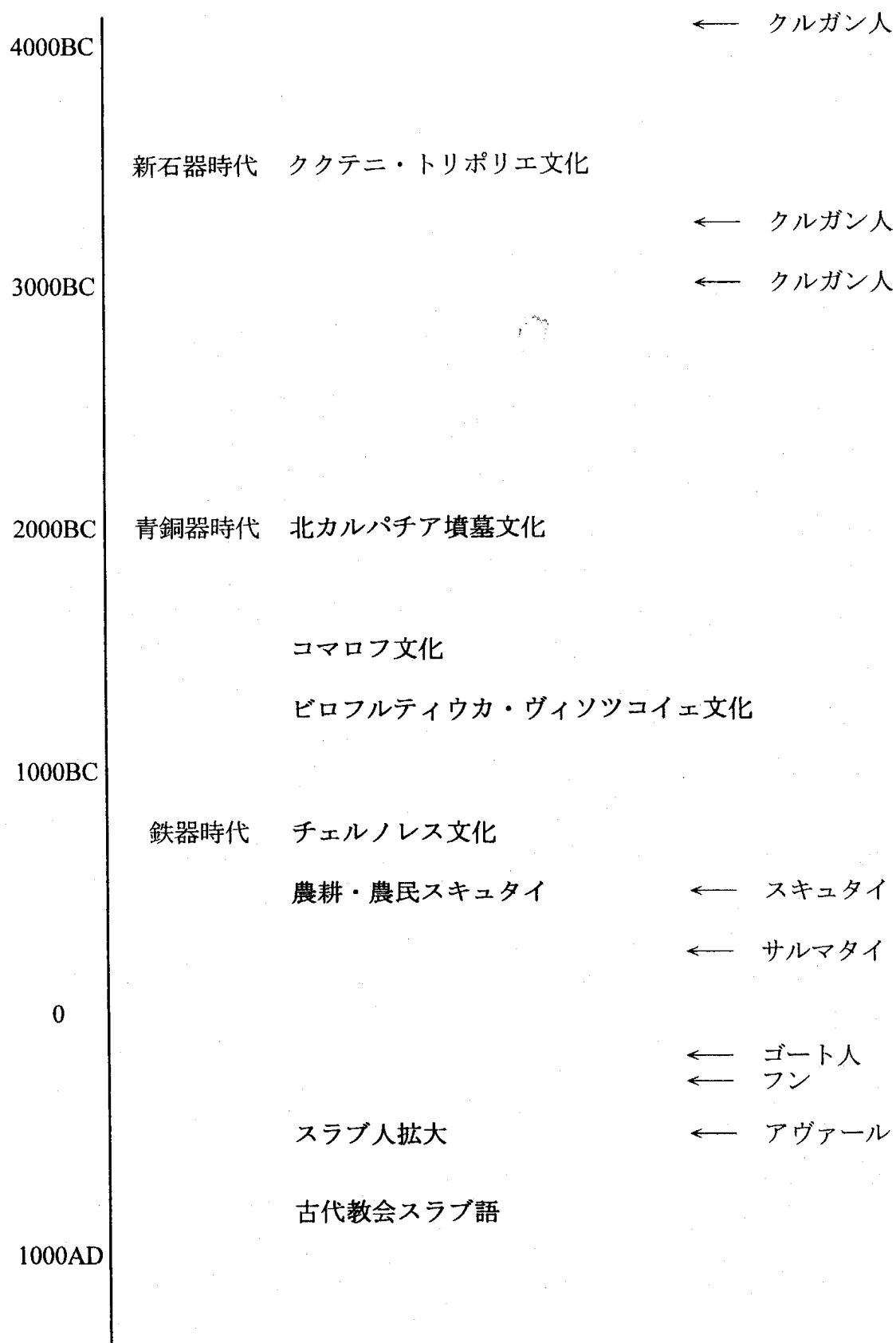
したはずであり，ここに両言語がヨーロッパの印欧語の中で特に保守性が高いという事実を生んだ遠因があると考えられる。

古典文献に登場するウェネティ，スクラウェニ，アンタエなど，スラブ人を表したと思われる様々な名称についての検討は次回に譲ることにする。

(以下次号)

略語表

Celt.	ケルト祖語	OCS	古代教会スラブ語
CS	(後期) 共通スラブ語	OE	古(期) 英語
Cz.	チェコ語	OHG	古高ドイツ語
E.	英語	ON	古ノルド語
F.	フランス語	ONF	古期北部フランス語
G.	ドイツ語	OPr.	古プロシア語
Gk.	(古典) ギリシア語	OR	古代ロシア語
Gmc.	ゲルマン祖語	Pol.	ポーランド語
Goth.	ゴート語	PS	(早期) スラブ祖語
IE	印欧祖語	R.	ロシア語
Ir.	アイルランド語	SCr.	セルビア語, クロアチア語
Lat.	ラテン語	Skr.	サンスクリット
Lith.	リトアニア語	Uk.	ウクライナ語



スラブ民族形成の年表

註

- (1) 慣用に従い古典期の発音を基にした呼称を用いた。当時の発音からすればキリロス, メソデオスが適当である。ロシア語等の現代スラブ諸語の発音からキリール, メフォーディーあるいはメトディー等とも呼ばれる。
- (2) Hoffer (1989) の大胆な説による。
- (3) ただし、現在のバルト人居住地域は除外される。
- (4) 主として Vasmer (1926; 1964-73), Feist (1939), Shevelov (1964) を参考にして選定したが、借用関係に異論のあるものも含まれている。言語名の略記方法については文末の略語表を参照のこと。また、スラブ語の前史については、長母音と二重母音並びに閉音節を保持している段階 (PS) と、それらの排除を経験した前史の最終段階 (CS) とを区別する。この区別については神山 (1992; 1998; 2001) 等を参照されたい。
- (5) 前史時代のスラブ語には f の音素が欠けていたため、外来語の f や pf を p で受け入れたと考えられる。スラブ語に音素 f が生じるのはギリシア語からの外来語を多数含む古代教会スラブ語が成立してからのことである。
- (6) 流音に終わる擬似二重母音の発達については神山 (2001) を参照。
- (7) PS k, g, ch は前舌母音の前で規則的に CS č, ž, š に転じる (第1硬口蓋化)。
- (8) PS k, g, ch は PS *ai から生じた新たな前舌母音 CS *ě/*i の前で規則的に CS c, (d)z, s (西は š) に転じる (第2硬口蓋化)。
- (9) 第1硬口蓋化が期待される音環境において第2硬口蓋化が生じている。この語が採用されたのは比較的遅く、そのときにはすでに第1硬口蓋化は終了していたと考えられる。
- (10) i の後にある PS k, g, ch はしばしば CS c, (d)z, s となる (第3硬口蓋化)。
- (11) 語源的に期待されるのは *dbska であるが、文証形に ь が生じたのは外来語で先行子音が軟化しなかったからだと説明されることが多い。あるいは写字生の誤りが固定したためかもしれない。この種の誤りは古代教会スラブ語のテキストに頻発する。
- (12) OCS 形と R 形との差異については納得できる説明は知られていない。
- (13) IE *gh はサタム語たるスラブ語で *z に至るはずであるから、この語は IE *ghans- から直接的にスラブ語に受け継がれた語とみなすのには無理がある (cf. Lith. žąsis). ゲルマン語の借用というよりも、むしろ正統なスラブ語形 *zansis とゲルマン語形との混交とみなすべきかも知れない。
- (14) スラブ語は母音ではじまる語の前に前置子音を置くが多かった。本来的に *u,

- *ū (> CS *ъ, *y) ではじまる語の前には規則的に v- が付加される。
- (15) 第1音節の母音は *velii* 「大きい」 (cf. R. *великий*) との混交によって説明される。ロシア語形では本来唇音と j の間に予期される挿入音の l が類推によって加わり、さらに後代に l-l を r-l に異化して作られた改新形。この種の異化については神山 (1995: 183ff.) を参照。
- (16) *Wulfila* あるいは *Ulfilas* (c. 311-383) は、264年にゴートが小アジア進出を企てた折、カッパドキアから連れ去られた捕虜の子孫である。336年使節団に同行してコンスタンティノーポリスに赴き、司教に叙階されて後世をゴート人へのキリスト教布教に捧げた。ただし、彼が信奉したのは325年ニカイア（現ニース）宗教会議で異端とされたアリウス派であり、三位一体を認めない。
- (17) ラヴレンチー写本 (Кошелев 1997) に従う。原典での *титло* による略記は括弧によって補った。ただし数字はこの限りでない。
- (18) これはもともと中部ドイツに居留していたケルト部族の名 *Lat Volcae* (= Celt. **Wolkai*) であり、この部族はゲルマン人の南下に圧されてガリアに移動したのだが、ゲルマン人は彼らが去った後にもウォルカエの名 (e.g. OHG *Walh*) を（本来は南の）隣族の一般的呼称に用いた。そのためここに登場するのが何人かを決定するのは困難である。ウォルカエの名残は派生形容詞 **walh-isk-* に由来する E. *Welsh* 「ウェールズの」や G. *welsch* 「ロマンス語地域の」に見られる。**walh-* はスラブ人に借用され、主としてバルカン半島のロマンス語の話し手を表すようになっている。主格 **walh-as* からの規則的発達形である OR *волохъ* は後にドイツ語に逆輸入されて G. *Walachei* 「ワラキア」(> R. *Валахия*) を生み出しており、またその南スラブ語的な対応形 **влах* はロシア人の姓 *Евлахов* に見える。Vasmer (1964-73 I: 269), Martinet (1986, 1994²: 27f.; 2003: 18) を参照。
- (19) ティシア *Tisia* (現ティサ *Tisza*) 川、ダナビウス *Danabius* (現ドナウ) 川、フルタウシス *Flutausis* (現オルト *Olt*) 川に挟まれた地域を指す。ローマの属領としての古名はダキアだが、ヨルダネスの執筆当時にはフンを駆逐したゲルマンのゲピード族が占拠していた。
- (20) 北のカルパチア山脈から南のトランシルバニアアルプス、西のアプセニ山地を含めると、連山がほぼ円形を成しており、王冠の形状に似ていると考えられる。
- (21) ヨルダネスの記す *Novietunum* を *Noviodunum* と解釈すれば、この古名を持つドナウ川河口近くの南側にある現ルーマニア領イサクチャ *Isaccea* が有力な候補地となるらしい。*Noviodunum* はカエサル『ガリア戦記』II-12に言及されるものをはじめとして旧ケルト人支配地に複数あり、Celt. **now-y-o* “new” + **dūn-o-m* “town” と分析される。
- (22) 場所の特定は非常に難しく、18世紀以来クロアチアのムルサ *Mursa* (現オシエ

- ク Osijek) 周辺, オーストリアとハンガリーに跨るノイジードラー Neusiedler 湖, ドナウ河口部 (ルーマニア側のラゼルム Razelm 湖, ウクライナ側のヤルプフ Ялпуг 湖), シレット Siret 川の支流ムセウス Museus (現ブザウ Buzău) 川 (ルーマニア) が候補にあがっているが, そのうちどこか有望かすら研究者の同意には至っていない。
- (23) 他文献にはこの古称についての言及はないらしい。この箇所の記述からしてもスロイとはギリシア人の側から見たスラブ人に対する蔑称 (いわば「バラバラ人」) と思われる。
- (24) 『原初年代記』にもペルーンに触れた箇所がある (國本他 1987: 32, 59, 93, 357, 403f.). 森安 (1986: 292) はこれらの神々がスラブ共通か否かを疑っているが, Погодин (1993: 131) によればこれらのスラブ共通性はすでにアルツィホフスキーによって確認されているという。
- (25) 詳しくは Buck (1949: 36f.), Schrader (1977: 34ff.), Martinet (1986, 1994²: 43ff.; 2003: 35ff.), Mallory & Adams (1997: 503f.) 等に譲るが, IE *mori- の本来の語義は英語からも窺える。英国湖水地方の Windermere, Buttermere, Grasmere 等は極めて小さな湖だし, 派生語 marsh は「沼地」を指す。また, moor は今でこそ「荒地」を表わすが, かつては G. Moor と同じく「湿地」を意味した。
- (26) 括弧内には原義を記す: e.g. Gk. θάλασσα (深み), πόντος (道, 旅のルート), ἅλς (塩), πέλαγος (平坦), Lat. aequor (平坦), Skr. jrayas- (平坦), sāgara- (川を飲み込むもの), Gmc. *saiwiz (as in E. sea; 原義不詳; 恐らく北欧の先住民族からの借用語), ON haf (上昇), Ir. faraige /'farəgʲə/ (怒涛), 等々。
- (27) 蛇足だが, 同源の Gk. βορέας (> Lat. boreas) は北風と北を表す。これはペロポネソス半島から見て北にあるオリュンポス山系からの寒風とその方角を意味したと考えられる。いわば「六甲おろし」ならぬ「オリュンポスおろし」と言ったところであろうか。印欧語全体での方位の呼称に関しては Buck (1949), Martinet (1986, 1994²: 252f.; 2003: 307ff.), Mallory & Adams (1997) 等を参照のこと。
- (28) このリストはブナが欠けており, スラブ語におけるこの木の名称はゲルマン語からの借用語である: Gmc. *bōkaz (cf. beech < *bōk-y-ōn) → PS *baukas > CS *bukъ (e.g. R. бук). この点についてはこの節末尾に触れる。
- (29) 後代に混同されて「樅」(пихта) をも指すようになっている。スラブ人の原住地には樅は生えていなかった。
- (30) 一般に海鳥と誤解されているが, そのほとんどが沿岸・内陸に生息する。
- (31) R. карп 等の現代スラブ語での該当語は, ヨーロッパのほとんどの言語の場合と同じく, ゲルマン語から後期ラテン語 carpan を経て広まったらしい。この語はもともと非印欧系の借用語と思われる。Martinet (2003: 40) に付した訳註 31 を参照され

たい。

- (32) この議論については風間 (1978; 1993) に手際よくまとめられている。
- (33) Gimbutas (1963; 1968; 1971; 1977; 1980; 1982). 一般に男性名で知られているが、本名はその女性形 Gimbutienė である。
- (34) 過去に行われてきたその他諸々の説については風間 (1978; 1993) に譲る。
- (35) 族長と考えられる人物の遺骸を葬った盛土をした墳墓。古トルコ語 *kuryan* から R. курган を経由して国際的な用語となっている。「高塚墳」や単に「古墳」と呼ばれることもある。この種の墳墓の調査から、この埋葬方式を用いる民族が問題のステップ地域から特にヨーロッパに及んだことが跡付けられる。
- (36) 後掲の年表を参照されたい。ヘロドトス IV-17ff. に登場する「農耕スキュタイ」, 「農民スキュタイ」はスキュタイに支配されたスラブ人を表した可能性が高い。詳細は次号掲載の続編に譲る。

参考文献

- Bernštejn (Бернштейн, С. Б.) 1961 *Очерк сравнительной грамматики славянских языков. Том 1. Москва: Академия наук СССР.*
- Buck, Carl Darling 1949 *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages (A Contribution to the History of Ideas).* Chacago / London : The University of Chicago Press.
- Caesar, Gaius Iulius (近山金次訳編) 1964 『ガリア戦記』 岩波文庫。
- Černych (Черных, Павел Яковлевич) 1993 *Историко-этимологический словарь русского языка. I-II. Москва: Русский язык.*
- Feist, Sigmund 1939 *Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache. Dritte neuarbeitete und vermehrte Auflage. Leiden: Brill.*
- Filin (Филин, Федот Петрович) 1962 *Образование языка восточных славян. Москва/ Ленинград: Издательство Академии наук СССР.*
- Gimbutas, Marija 1963 *The Balts.* London: Thames and Hudson.
- . 1968 *Die Indoeuropäer.* in Scherer (1968).
- . 1971 *The Slavs.* London: Thames and Hudson.
- . 1977 *The first wave of Eurasian steppe pastoralists into copper age Europe. The Journal*

- of *Indo-European*, 5.
- . 1980 The Kurgan wave 2 (c. 3400-3200 B.C.) into Europe and the following transformation of culture. *The Journal of Indo-European*, 8.
- . 1982 Old Europe in the fifth millennium B.C. (The European situation on the arrival of Indo-Europeans). Edgar C. Polomé (ed.) *The Indo-Europeans in the fourth and third millennia*. Ann Arbor, Michigan: Karoma.
- Gobarev (Гобарев, Виктор Михайлович) 1994 *Предыстория Руси*, I-II. Москва : Менеджер.
- Hall, John Richard Clark 1960 *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th ed., with a supplement by Herbert D. Meritt. Cambridge University Press.
- Herodotus (松平千秋訳) 『歴史』(上・中・下) 岩波文庫.
- Hirunuma (蛭沼寿夫) 1988 「ヴェネト語」『言語学大辞典』第1巻 : 世界言語編 (上) 三省堂.
- Hoffer, Angelika, Edle von Sulmthal & Margaritoff, Michael 1989 *За Кирил и Методий*. София : Издателство на Отечествения фронт.
- Iordanes (Скржинская, Елена Чеславовна編) 1960 *О происхождении и деяниях гетов «Getica»* (= *De origine actibusque getarum*). Москва : Издательство восточной литературы.
- Kamiyama (神山孝夫) 1992 「スラブ語の『娘』をめぐって」『ロシア・ソビエト研究』16.
- . 1995 『日欧比較音声学入門』 鳳書房.
- . 1998 On the Vowel Lengthening of the Sigmatic Aorist in the Prehistory of Slavic. *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures (Japanese Contributions to the XIIth International Congress of Slavists)*. University of Tokyo.
- . 2001 「印欧祖語の成節流音をめぐって——スラブ語前史における「開音節法則」とメタテーゼ——」『ロシア・東欧研究』5.
- Kazama (風間喜代三) 1978 「印欧語族の源郷」『言語』vol. 7, no. 11. 大修館書店.
- . 1993 『印欧語の故郷を探る』 岩波新書.
- Kinder, Hermann & Hilgemann, Werner 1974² *Atlas zur Weltgeschichte*. München: Deutscher Taschenbuchverlag (成瀬治監修 1978 『カラー世界史百科』 平凡社).
- Кошелев, А. (издатель) 1997 *Лаврентьевская летопись*. Полное собрание русских летописей. том I. Москва: Языки русской культуры.
- Kunimoto (國本哲男) 1972 「スラヴ原住地問題について」『ロシア語ロシア文学研究』4.
- . 1973 「アント考 (6世紀のスラヴ人)」『ロシア史研究』20.

- . 1976 『ロシア国家の起源』 ミネルヴァ書房.
- , 山口巖, 中條直樹他訳編 1987 『ロシア原初年代記』 名古屋大学出版会.
- Mallory, J. P. 1989 *In Search of the Indo-Europeans (Language, Archeology and Myth)*. London: Thames and Hudson.
- . & Adams, D. Q. (eds.) 1997 *Encyclopedia of Indo-European Culture*. London / Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers.
- Mareš, František Václav 1991² Vom Urslavischen zum Kirchenslavischen. Peter Rehder (ed.) *Einführung in die slavischen Sprachen*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft (神山孝夫訳編 1996 「スラブ祖語から教会スラブ語へ——スラブ文語前史概説——」 『大阪外国語大学論集』 15).
- Martinet, André 1986, 1994² *Des steppes aux océans — l'indo-européen et les «Indo-Européennes»* —. Paris: Payot et Rivages (神山孝夫訳編 2003 『「印欧人」のことは誌——比較言語学概説——』 ひつじ書房).
- Matsutani (松谷健二) 1994 『東ゴート興亡史——東西ローマのはざまにて——』 白水社.
- Mavrodin (Мавродин, Владимир Васильевич) 1978 *Происхождение русского народа* (石黒寛訳編 1993 『ロシア民族の起源』 群像社).
- Moriyasu (森安達也編) 1986 『スラヴ民族と東欧・ロシア』 (民族の世界史10) 山川出版社.
- Myl'nikov (Мыльников, Александр Сергеевич) 1963 *Павел Шафарик — выдающийся ученый-славист*. Москва/Ленинград: Издательство Академии наук СССР.
- Niederle, L. 1902-25 *Slovanské starožitnosti*. Vol. 1-11. Praha.
- Pokorny, Julius 1959 *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. I-II. Tübingen/Basel: Francke Verlag.
- Procopius (Προκόπιος Καισαρεύς) 1954 *History of the Wars* (ΥΠΕΡ ΤΩΝ ΠΟΛΕΜΩΝ ΛΟΓΟΣ ΠΡΩΤΟΣ). I-VII. London: Loeb Classical Library.
- Šanskij (Шанский, Н. М.) 1963- *Этимологический словарь русского языка*. 1-8. Издательство Московского университета.
- Schenker, Alexander M. 1996 *The Dawn of Slavic (An Introduction to Slavic Philology)*. New Haven & London: Yale University Press.
- Scherer, Anton (ed.) 1968 *Die Urheimat der Indogermanen*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Schrader, Otto (Hans Krahe改訂, 風間喜代三訳) 1977 『インド・ヨーロッパ語族』 クロノス.
- Shevelov, George 1964 *A Prehistory of Slavic (The Historical Phonology of Common Slavic)*.

Heidelberg: Winter.

Shimizu (清水陸夫) 1983 『スラヴ民族史の研究』 山川出版社.

Tacitus (泉井久之助訳編) 『ゲルマーニア』 岩波文庫.

Trubačev (Трубачев О. Н.) 1974- *Этимологический словарь славянских языков (Православянский лексический фонд)*. Москва: Наука.

Vasmer, Max 1926 *Die Urheimat der Slaven. Der ostdeutsche Volksboden* (hrsg. von W. Volz). Breslau (reprinted in Vasmer 1971).

——. 1971 *Schriften zur slavischen Altertumskunde und Namenkunde* (hrsg. von H. Bräuer). I-II. Berlin (Wiesbaden: Harrassowitz).

——. 1964-73 *Этимологический словарь русского языка*. I-IV. (с дополнением О. Н. Трубачева) Москва: Прогресс.

Watkins, Calvert (ed.) 1985, 2000² *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston: Houghton Mifflin Company.

Wright, Joseph 1954² *Grammar of the Gothic Language*. Second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce. Oxford: Clarendon Press.

Ziegler, Konrat & Sontheimer, Walther (red.) 1979 *Der kleine Pauly. Lexikon der Antike*. Auf der Grundlage von Pauly's Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft unter Mitwirkung zahlreicher Fachgelehrter. DTV.

Резюме

Славяне в предысторические времена

(часть первая)

КАМИЯМА Такао

Как сложилась славянская нация? Где прародина современных славян? Такого рода на первый взгляд ненаучные вопросы, конечно, не имеют отношения к собственным лингвистическим исследованиям истории и предыстории славянских языков. Но, тем не менее, думается, что необходимо найти адекватные ответы на них хотя бы для того, чтобы получить правильное представление о развитии общеславянского языкового единства в предысторические времена. Задача настоящей скромной работы состоит в том, чтобы проанализировать и обобщить самые разные данные (лингвистические, исторические и археологические) о развитии славянской и соседствующих наций и утвердить тем самым основу для лингвистической реконструкции предысторических этапов не только отдельно взятой славянской ветви, но и всех индоевропейских языков.

Из собранных материалов выявилась следующая картина. В глубочайшей древности первоначальная недифференцированная индоевропейская (курганская) нация занимала определенную часть среднеазиатской степи, вела кочевой образ жизни. И вдруг к концу пятого тысячелетия до нашей эры, по какой-то пока неизвестной нам причине, она начала экспансию на запад и на юг. Поскольку праиндоевропейцы давно обладали навыками конной езды, у них оказалось подавляющее превосходство в силах, которое позволило им завоевать значительную часть Европы, Малой и Южной Азии к началу третьего тысячелетия.

По всей видимости, предками славянского народа была населена сегодняшняя Западная Украина — болотистая, покрытая лиственными и хвойными лесами, и следовательно богатая разными растениями, животными и птицами местность. Такая гипотеза о прародине славян подтверждается историческими, лингво-палеонтологическими, гидротопонимическими и археологическими свидетельствами. Правда некоторые, особенно польские, ученые продолжают отстаивать теорию о том, якобы прародина славян исконно лежала между Вислой и Одрой, но такой малоосновательный, слишком патриотичный взгляд на проблему, безусловно, никак неприемлем.

Праславяне жили на своей родине без всяких серьезных внешних вмешательств со стороны других наций вплоть до третьего века до нашей эры, когда кочевое племя иранского происхождения «сарматы» завоевало и подчинило себе обширную территорию северного побережья Черного моря. Но и после этого славяне не лишились своей национальной идентичности. Благодаря контактам с различными германскими племенами, и в том числе с готами, которые по пути переселения прошли северный склон Карпат, славяне приобрели новые технические знания, позволившие им существенно улучшить условия жизни, а также агротехнические приемы принесли увеличение урожая. Известно, что чем выше пищевое производство, тем выше темпы прироста населения. И, в конце концов, примерно к концу пятого века нашей эры славяне заселили весь Балканский полуостров, среднюю Европу и территорию древней Руси.

Продолжение в следующем номере, где раскрывается тайна Венетов, Склавинов и Антов, которые общепризнанно считаются предками славян.

(20.02.2003)